

## 『二十世紀中国文学図誌』 13 (選訳)<sup>1)</sup>

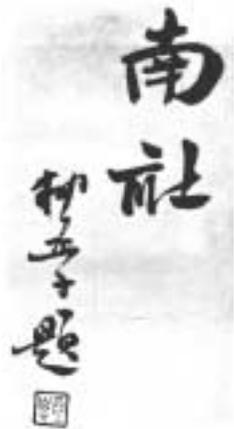
森川 麦生 登美江・中井政喜 訳

### 三十七、南社の「唐音」と「詩界革命」(楊義著 森川 麦生 登美江訳)

南社は清末民国初期における、規模の最も大きい、持続期間の最も長い革命的文学団体である。その主要な三人の発起人、陳去病(1874 - 1933)、高旭(1877 - 1925)、柳亜子(1887 - 1958)はともに中国同盟会会員であった。1909年11月13日、呉江、呉県、金山から集まってきた多数の文友は、蘇州虎丘の張東陽祠で正式に成立大会を開いた。張東陽とは清に抵抗した明末の志士張国維のことで、戦いに敗れた後、投身自殺した。虎丘は明末の抗清組織復社が大会を召集した場所であり、この由緒ある場所は「古の幽情を思い、反清の意気を奮い起こすことができた。

南社の名前の由来について、重要メンバーである寧調元は、「鐘儀は南音を操り、本を忘れざるなり(『左伝』成公9年の故事に基づく)」、「南社詩序」、「南社叢刻」第二集)<sup>2)</sup>と云う。柳亜子は「新南社成立布告」(1923・10)の中で、「その名前を南社と命名したのは、北庭〔単于の朝廷〕に反対する標識であった」<sup>3)</sup>、と云う。さらに革命陣営における南社の立場を次のように解説する。「このとき、孫中山氏とその同志達は、海外で中国同盟会を創設し、三民主義を呼びかけていた、……しかし国内で知識人を称する人々は、相変わらず茫然朦朧として、『天王聖明にして、臣の罪まさに誅すべし』という甘い夢を見ていた。我々が呼びかけた南社は、中国同盟会と内外呼応するつもりであった。」「(『新南社成立布告』)南社の社友は最初の集会時の17名から、その後次々に増加して1,100余名になる。辛亥革命前後社友は続々と、当時全国の文化的中心であった上海に集まった。彼等は上海の大小の新聞、『民立報』『神州日報』『時報』『申報』『天鐸報』『太平洋報』『民権報』『民国日報』などを主管し、一時、「今日の中国国内をご覧なさい、なんと南社の天下だ」という冗談が生まれた。

南社の刊行物が『南社叢刻』である。表紙には柳亜子の書いた「南社」の二字がある。その中に、「南社文選」「南社詩録」「南社詞選」などの欄が設けられ、計22集出版した。第一集は1910年1月に出版され、巻頭は陳去病の「南社詩文詞選叙」である。中



柳亜子南社  
のための題記

には柳亜子の「磨剣室文初集」や高旭の「願無尽齋詩話」<sup>4</sup> 八則がある。高旭と馬君武(1881 - 1940)は、もともと梁啓超、黄遵憲、夏曾佑、譚嗣同の「詩界革命」派の人物である。高旭の作詩はたとえば次のようである。「天人魔物は科別ち難く、化・湿・卵・胎は数えきれず。国土は莊嚴にして我が相を忘れ、電空簸蕩して雷声を発す。」<sup>5</sup>これは儒教、仏教、キリスト教と、いくぶんかの科学的知識を混ぜ合わせたもので、譚嗣同にやや似る。また「新雜謡」「女子唱歌」「愛祖国歌」「軍国民歌」「近事新樂府」「光復歌」などがあり、離騷体、樂府体、歌行体、および自ら創作の新体を採用する。馬君武の詩は、「須く旧錦より新様に翻すべく、今魂を以て古胎に托すなからん」(「寄南社同人」)<sup>6</sup>ことを追求し、「欧州とアジアの文学精神を一つの炉の中に溶かして、ともに修めることのできた者」<sup>7</sup>と称賛される。南社成立以後において、馬君武はなお断固として、「新学の思潮を鼓吹し、愛国主義を標榜する」(『馬君武詩稿』自序)<sup>8</sup>ことができた。しかし高旭はすでに「願無尽齋詩話」において、一方で「人権を鼓吹し、専制を排斥して、人民の独立的思想を喚起し、人民の人種的觀念を進める」ことを述べ、また他方において「復古」的態度で「詩界革命」を継続することを主張していた。「詩文は復古において貴い、これはもとより不滅の論である。しかしいわゆる復古とは、精神的に似ている点にあって、形式的に似ている点にはない。」<sup>9</sup>「もしも古人の境地と神髓を深く体得することができるならば、たとえ最新の言葉を採用して飾り付けてあっても、古に背くものではなく、真に復古し得ると言ってもよいのである。故に詩界革命とは、復古の美称である。」<sup>10</sup>高旭は多数の社友にたいして、自分がかつて関与した「詩界革命」を弁解し、調和を求めていると思われる。南社の政治的態度は維新派に比べて急進的である。しかし文化的態度は逆にやや保守的になっていることが分かる。

南社の主流派の方は、盛唐の音〔盛唐の詩風〕と、辛棄疾〔号は稼軒居士〕の詞、龔定庵〔龔自珍〕の詩のような類の、慷慨激昂し、鐘や太鼓のような大音声の作品スタイルを推奨した。平素から「南社の精神」と言われた柳亜子は、もとの名を慰高、字を安如、と言う。フランスのルソー(盧梭)の『民約論〔社会契約論〕』を読んで、名を人権、字を亜廬と改め、アジアのルソーを自負した。また柳亜子は南宋の詞人辛棄疾を敬慕し、棄疾を襲って名とし、また稼軒と号した。柳亜子は虎丘の集いで唐の文辞と辛棄疾を推奨したため、江西詩派〔宋の龔庭堅を宗とする詩派〕に傾倒する社友と論争となり、自分がかつたために立腹して号泣した。『磨剣室詩初集』巻七には、「時流詩を論ずるに両宋を驚る、巢南(陳去病の字)は独り唐風を尊びて余と相合す、一章を写示すなわち留別に



尹煥石による柳亜子画像  
1945.9

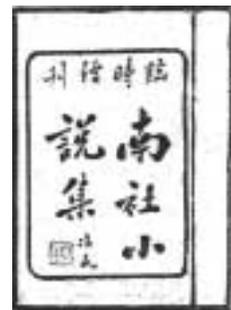
用ふ」(1909)<sup>11</sup>の詩がある。

匆匆として半月昌亭に住まり、汝と詩派を評量し来る。  
 一代の典型已に尽くるを嗟く、百年の壇坫誰が開くところと為らん。<sup>12</sup>  
 横流して解悟す蘇黄の罪、大雅当に推すべし陳夏の才  
 珍重せよと襟を分くるに別の語なし、餐を加ふるに先ず掌中の杯を覆さん。<sup>13</sup>

柳亜子が蘇軾、黄庭堅を非難するのは、実は江西詩派のタブーに触れるものであり、明末、清に抵抗した詩人陳子龍、夏完淳を高く評価するのは、実は彼らが継承する唐風を重視している。柳亜子は政治的抒情詩を多く書いた。それらは奔放激昂するもので、「悲歌慷慨して気は虹を呑む、君は是れ当年の陸放翁」<sup>14</sup>と称賛された。たとえば柳亜子には袁世凱が皇帝を称することに反対した「孤憤」(1915)の詩がある。

孤憤真に防がん地維を決するを、忍びて醒眼を上げ群屍を見る。  
 新を美とするは已に揚雄の頌に見る、勸進は還た阮籍の詞に伝ふ。  
 豈に沐猴能く帝と作る有らんや、居然として腐鼠も亦時に乗ず。  
 宵来忽ち作す亡秦の夢、北伐の声中に誓師を起こす。<sup>15</sup>

しかし、南社は大変雑多な集団であった。たとえば1917年文明書局から発行した『南社小説集』は、表紙は蔡治民<sup>16</sup>の題簽で、その中の小説は「まじめなものとくだけたものが半々、創作と翻訳がどちらもあり」、鴛鴦蝴蝶派の雰囲気はかなりあった。1919年に出版された「南社叢刻」第二十一集は、姚石子<sup>17</sup>が内部分裂後の事態を持ちこたえている。その中で馮平<sup>18</sup>の「夢羅浮館詞集序」は、新文化運動を排斥し、保守退嬰の思想を宣伝して、次のように考える。「かのバイロン、シェークスピア、ヴォルテール等は、もとより我が少陵、太白、稼軒、白石の諸先哲〔杜甫、李白、辛棄疾、姜夔〕に遠く及ばない」<sup>19</sup>、「数年来、愛国尚古の士は……ともに国粹の保存を謀り、旧学のことを考えてきた。そのため詩詞歌曲は頓に旧観を回復し、閉鎖的で暗い文学界について光明の輝く希望が出てきた。」と喜ぶ。もともと南社の内部には異なった政治的理想が存在していた。また、或いは時代とともに進み、或いは保守的退嬰的であるような異なった文化的態度が存在していた。辛亥革命前の反清闘争において、また民国初年の反袁世凱闘争においては、おおよそ一致した政治的方向を保つことができた。しかし新文化運動の勃興と政治運動の曲折深化にともない、南社が質的に変化し、分化するのも必然の勢いとなってい



た。

辛亥革命前後、紹興、瀋陽、広州、南京等の地にかつて相次いで南社の支社組織、越社、遼社、広南社、淮南社が成立した。1917年、南社の一部の成員は、鄭孝胥、陳衍、陳立三等の「同光体」<sup>20</sup>の詩人を持ち上げた。そのため柳亜子、呉虞の激しい反対を引き起こす。柳亜子は「妄人詩派を謬論するに、此を書して之を折む」の詩を作り、次のように叙した。「詩派江西寧ぞ道うに足らん、妄りに燕石を持して瓊裾を詆る〔やたら偽の玉石を持って美しいおび玉を非難する〕」、「分寧の茶客黄山谷、能く詩家の三昧を解するや無や。」このことが相手方の攻撃と謾罵を招いた後、柳亜子は南社主任の名目によって彼らを追い出した。この内紛は、後に高旭等の南社の議員が賄賂を受けて曹錕を総統に選ぶ「猪仔議員」となったことと重なり、結局南社の解体を導いた。



1923年、柳亜子、葉楚傖、邵力士、陳望道等の人は、改めて新南社を組織した。彼らは新文化運動に同情を寄せ、孫中山の革命事業に身を投じた。「新南社発起宣言」(1923年)には次のように言う。「南社の発起は、民族的気概を提唱する時代にあった。新南社の孵化は、世界の潮流を導き受け容れる時代にある。南社の一部の者は断じて、時代の落伍者となることを望まない。この点は、新南社の孵化の中で国民に高らかに声明しなければならぬ。」<sup>21</sup>これに対立するものには、傅斯年<sup>22</sup>が発起した南社湘集がある。1928年〔政局が一段落を告げた〕以後、陳去病、柳亜子は次々と南社を記念する事業を起こし、それは1935年に「南社紀念会」を成立させるまで続く。また翌年上海で紀念会の第二回会食を行った後、上海開華書局から『南社詩集』6冊を出版した。

### 三十八、初期の新劇〔話劇〕<sup>23</sup>と春柳社(楊義著 森川 麦生 登美江訳)

清末の演劇革新はだいたい二つの路線に沿っている。一つの路線は伝統的演劇の改良である。最も有名なものに、汪笑儂(1858 - 1918)が上海の丹桂茶園、春仙茶園で京劇を歌い、革命的志士と協力して雑誌『二十世紀大舞台』(1904・9)を創刊したことがある。汪笑儂はそれを通して、格式的演技派が非常に重視した京劇という演劇形式の中に、時代の政治的情熱と外来の審美的要素を、それぞれ違った程度に導き入れた。もう一つの路線は西洋新劇の導入である。これには先ず、1899年前後の上海の教会学校における「素人演劇」がある(この方法は民国初年の天津南開学校でより傑出した成果を挙げる)。続いて、1906年冬、日本東京の中国人留学生が春柳社を組織して、新派劇を上演した。その後、上海の春陽社と進化団が新劇(原文、話劇)を上演し、そこに幾分かの伝統的演劇の上演

方法を浸透させて、いわゆる「文明劇」(原文、文明戯。初期の新劇)を作り出した。二十世紀初頭、東西文化が衝突する中において、この二つの路線は、出発点の異なる、中国伝統的演劇の転化の型を示している。

1907年2月、春柳社は東京で新劇「茶花女〔椿姫〕」を上演する。これが中国新劇史の幕開けだったと見る事ができよう。春柳社の創設者は李息霜(李叔同、出家後の僧名は弘一法師)と曾孝谷(号は存呉)であり、当時どちらも東京美術学校油絵科の留学生であった。その後欧陽予倩、陸鏡若(1885 - 1915)等の人々が参加した。陸鏡若と曾孝谷は日本の新派劇の名優(藤沢浅次郎)と交際が深く、その演目、演技は日本の新派劇に源泉がある。「茶花女」の劇では、李叔同が椿姫(マルグリット)、曾孝谷がアルマンの父、政治科の学生唐肯がアルマンを演じた。春柳社の創設者が絵画を学んでいたために、その演劇も芸術性を最大限に追求するものであった。李叔同は絵画芸術を舞台の扮装にも活用した。回想(欧陽予倩)によれば、次のように言う。「李叔同は中国の文章に造詣があり、絵がうまく、ピアノも弾け、書も上手であった……彼はしばしば絵画の中から参考となるものを探し、特にしぐさの形に注意を払った。李叔同はかつらや服をたくさん持っていて、部屋の中で独り扮装して鏡に映し、自らがモデルとなって自分で研究した。その結果に基づき、舞台上げて演じるよう努力した。」(欧陽予倩、「自我演戯以来」<sup>24</sup>)このことから日本の演劇界の権威松居松翁(1870 - 1933)は、「李君の優美婉麗さは、まことに日本の俳優とは比較にならない。」<sup>25</sup>と褒めた。李叔同の残したスチール写真からも、豊かな造形の美しさが見られる。

1907年6月春柳社は、米国ストー夫人の小説、林琴南訳の『黒奴(天録)』(原名は『湯姆叔叔的小屋〔アンクルトムズ・ケビン〕』)に基づいて改編した同名の戯曲五幕を上演する。東京早稲田大学演劇博物館に保存されている公演ポスターによれば、「脚本著作主任存呉(曾孝谷)、背景デザイン主任息霜(李叔同)」である。これは中国新劇における最初の創作脚本と見ることができよう。



1907年春柳社「黒奴〔天録〕」上演時のポスター

と見ることができよう。ポスターの下の方は一幕ごとの概要と出演俳優、まん中の絵は恐らく黒人奴隷が逃亡後に、追跡者と「雪崖の闘い」(第五幕)を行う情景を表し、左右の両側は「春柳社丁未演芸大会の開催趣旨」(1907年は丁未の年)である。

「演芸というものは文明との関係が極めて大きい。故に春柳社はその創設早々に、専門部を特に設け、新旧の戯曲を研究した。我が国の芸術界改善の先導となることを願っている。当社はこの春に、〔中華基督教〕青年会で上演して慈善に協力し、友人諸氏の喝采

を博した。ついで国内外の青年の援助を様々に得た。当社はこうした時機にあたり、自らの願望を断念することはできない。ここに六月一日と二日、本郷座を借りて丁未演芸大会を開くことに決定し、両日午後一時より『黒奴天録』五幕を上演する。全内容の概略および各幕の出演者名は、左側に列挙する。風雅を解する紳士諸氏よ、幸いにしのご教示を賜らんことを。」<sup>26</sup>

この上演は内容において、当時の日増しに増大する民族的憂慮と自強の意識に適っていた。形式と技巧のうえでも大きな成功を収め、その後の新劇の発展において先駆的模範としての影響を及ぼした。春柳社の成員が続々と帰国した後、1912年初め、陸鏡若は「新劇同志会〔原文、新劇同志会〕」を起し、欧陽予倩等とともに「家庭恩怨記〔陸鏡若作〕」「黄花岗」「猛回頭」<sup>27</sup>、「社会鐘」<sup>28</sup>等の演目を上演する。1914年4月、彼らはまた上海南京路の謀得利劇場<sup>29</sup>で「春柳劇場」を設立し、俳優の陣容はさらに強化されて、幕表形式<sup>30</sup>で



上演する演目は八十一種類にも達した。そして「乳姊妹〔ちきょうだい〕」1919年(?)、上海笑舞台。右から二人目欧陽予倩で「鴛鴦剣」「大鬧寧国府」「夏金桂」「晴雯補表」<sup>31</sup>等の比較的特色のある紅樓夢劇が現れる。しかし彼らが歩いたのはかなりまじめで純粋な新劇の道であったために、格調が高くて俗受けせず、市場にあまり適応できなかった。そのため1915年陸鏡若が過労死したのに伴い、春柳劇場も解散した。

『黒奴天録』は1907年、王鐘声が上海に組織した春陽社によって上演された。これが中国国内の劇場で最初に上演された多幕新劇である。春陽社は「秋瑾」「徐錫麟」「張汶祥刺馬」等の演目もかけたことがあり<sup>32</sup>、革命的政治的色彩が非常に濃厚なものである。やや遅れて、1910年任天知<sup>33</sup>が上海で進化団を組織した。メンバーには汪優游、陳大悲等がいて、これは中国新劇における最初の職業的な劇団であった。彼らは「血蓑衣」「新茶花」「安重根刺伊藤」「血淚碑」等の劇を演じ、辛亥革命時期には、「黄金赤血」「共和万歳」「黄鶴樓」等の劇を迅速に作っては上演し、機を逸せず政治的闘争に呼応した。



進化団の演劇は明瞭な「文明劇」〔初期の新劇の一つ〕の特徴を備えている。一つには「言論派老生」<sup>34</sup>という役柄のあったことで、しばしば筋を離れて政治的議論をぶった。第

『自我演戲以来』欧陽予倩  
神州国光社、1933年版  
錢君の装幀

二に伝統的演劇伝奇でんきに従って時間空間の順序に幕を分けたこと、背景を換えるときには幕外劇〔幕の外側で劇を進行させる一種の幕間劇〕を挿入し、観客の退屈を紛らわせたことである。当時の演劇には往々にして整った脚本がなく、「幕表劇」まくひょうの方法で上演した。一枚の「大綱」(幕表)によって演技し、舞台での俳優の展開に任せるものである。その長所は演目を豊富にし、適時に現実を反映できることにある。しかし欠点として気ままになり粗雑になった。

1913年秋、鄭正秋ていせいしゅうの組織する新民社しんみんしゃと、それに続く張蝕川しよくせん けいえいさん、経営三けいえいさんの組織する民鳴社みんめいしゃは、すでに営利目的の演劇となっている。彼らは政治劇、社会劇を家庭劇に替え、複雑突飛な筋と安上がりやすがりの舞台効果を追求した。鄭正秋の得意の劇作「悪家庭」は、家庭の主人と召使いの間の誘惑、姦通を書き、また訴訟を種とするゆすりを描くもので、筋が現実離れし、人間の情理からかけ離れている。包天笑の翻訳作品「空谷蘭」<sup>35</sup>「梅花落」<sup>36</sup>に基づいて改編された演目は、最も人気を呼び、演技技巧にも進展があった。民鳴社の上演した連続長篇劇せいたいごう「西太后」は、過ぎ去って間もない前清の宮中の秘聞に対する人々の好奇心に合っ、商業上も非常に流行した。しかし文明劇の芸術的品位は急落して、春柳社の時期における芸術的理想とは同日に談ずることはできないものとなった。(森川 麦生 登美江：大分大学経済学部教授)

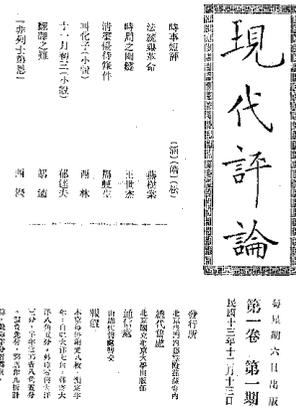
### 三十九、『現代評論』の「独立精神」(楊義著 中井政喜訳)

『現代評論』<sup>37</sup>は1924年12月北京で創刊し、1928年12月上海で終刊する。合計9巻209期と増刊4期<sup>38</sup>、多種の現代叢書を刊行した。『現代評論』は週刊誌の形式で、政治、経済、法律、哲学、教育、科学、文芸の諸分野を網羅する。每期八、九千部を発売し、当時においてはかなり大きな影響力を持った。「独立精神」を掲げ、第1巻第1期の「本刊啓事〔本刊のお知らせ〕」で次のように述べる。

「本刊の内容には、政治、経済、法律、文芸、科学等に関する様々な文章を含む。本刊の精神は独立にあって、付和雷同を事としない。本刊の態度は研究にあり、非難攻撃を重んじない。本刊の言論は実際の問題を重視し、空談を軽んずる。およそ本刊に佳作を授けんと思われる人は、通信であれ、論著であれ、歓迎する。本刊の同人は、本刊を純粹に同人のためだけの論壇とは考えない。同人及び同人の友人、読者による共同の論壇と考える。」(「本刊啓事」、第1巻第1期)<sup>39</sup>

『現代評論』の編集者と主要な執筆者の多くは、欧米の留学生と北京大学教授である。例えば前期において主たる編集責任を持つ王世傑せいけつはパリ大学法学博士であり、当時北京

大学法学部長兼教授である。周<sup>こうせい</sup>生はパリ大学法学博士で、当時北京大学政治学部長兼教授、燕樹棠は米国イエール大学法学博士で、北京大学法学部教授であった。文芸の原稿に責任を負う陳源<sup>せいえい</sup>（西滢）は英国に留学し、当時北京大学西洋文学部長兼教授、楊振声は米国ハーヴァード大学とコロンビア大学を中途退学し、当時文学部教授を勤める。こうした教授知名人のスタッフは、雑誌『新潮』のような、学生刊行物の青年の気鋭に充ちたものとは違って、西洋学問における博識びりをひけらかしながら、政治を議論し文章を評論した。それは人の模範たるのみならず、あ



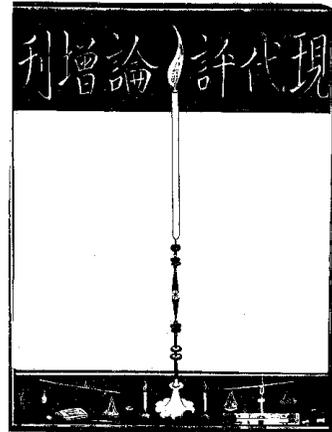
たかも「王者の師」たらんとするかのようであった。このことは、政局の混乱と激動の中において、『現代評論』が西洋自由主義の理想を手を把持しながらも、独立と従属の間に躊躇する運命を決定づけた。

編集の体裁はいつも真っ先に 時事短評 が置かれる。この筆者はたいてい王世傑や周<sup>ゆうしん</sup>生、燕樹棠、康有<sup>ゆうしん</sup>、陶孟和等の知名人士である。彼らは欧米の法律・政治のモデル形式に基づいて、北洋軍閥時期の時事を考察する。そこには事態に対する批判と補正のための意見が多く含まれることとなり、時に当局の反感を招く可能性もあった。例えば段祺瑞政府の京師警察庁は郵便局を通じて間接的に刊行物を没収することがあって、『現代評論』は「本刊特別緊急のお知らせ（警察庁によって第1巻第15期の没収を受けたこと）」を連続6期にわたって掲載し、抗議の意を示すこともあった。時事短評 欄はほとんど当時の政局の重大事件に言及する。例えば善後会議、関税会議、「五・三〇」上海事件（1925）、「三・一八」惨案（1926年）北伐戦争の時局、党治問題<sup>40</sup>などである。『現代評論』は女師大事件で専制的な教育当局に左袒した。そして密かに「紛争を挑発する」（「閑話」、陳源、第1巻第25期、1925・5）者がいる、と非難する文章を発表したことがある。また三・一八惨案の惨状を明るみに出す文章を発表し、殺害された学生市民に同情を示しながら、しかし一方で学生市民に自制を求めた。『現代評論』は、善後会議では始めから段祺瑞政府に付き、党治問題では最後には蒋介石に附く。それゆえに『現代評論』は、一部の同人が政治評論の衣を脱ぎ捨てて官僚となるための、道ならしの役目を果たした。

文化上の問題については、『現代評論』は大体「欧化」派である。胡適は第4巻第83期（1926・7）に「我們对于西洋近代文明的態度〔西洋近代文明に対する私達の態度〕」を発表する。胡適は、儒家の伝統的「知足〔足を知る〕」と「安命〔運命に安んずる〕」の觀念や道家の消極的無為の思想に対して、全面否定を行う。胡適は、物質的享受を追求する西洋近代文明の「足るを知らざる」精神と科学的精神を高く称賛して、次のように考察

する。「『足るを知らずとは神聖なものである』(Divine Discontent〔神聖な不満〕)と西洋人は説く。物質上の不満〔不知足〕が今日の鉄鋼の世界、蒸気機関の世界、電力の世界を生み出し、理知上の不満が今日の科学の世界を作りだした。社会政治制度上の不満が今日の民権の世界、自由な政体、男女平等の社会、労働神聖の呼び声、社会主義の運動を生みだした。神聖な不満は、あらゆる革新あらゆる進化の動力である。」陳西滢の「閑話」(第3巻第53期、1925・12)は、『現代評論』の特色が下記の点にあるとする。「『党同伐異』の社会の中においても、或る人は公認の仇敵を攻撃するのみならず、なお大胆に自分の友人を批評しようとする。民権を提唱する風潮の中で、或る人は強権に反抗するだけでなく、民衆をも批判しようとする。好悪によって是非に代える潮流の中において、或る人は科学的精神に基づき、事実を根拠として是非を討論する。」<sup>41</sup>このため、『現代評論』第4巻第90、91期(1926・8、9)には、当時燕京大学で歴史を教えていた青年常燕生の、胡適に対する反論の文章「東西文化問題質胡適之先生〔東西文化問題について胡適之氏に質す〕 読『我們对于西洋近代文明的態度』」が発表される。常燕生は東西文化を対立する二大体系と見ることに反対し、東西文化の異なる点は古今文化の相違に過ぎない、と考える。この解釈は決して欧化論と対立するものではなく、逆に歴史的進化論の補足となるものである。

『現代評論』は胡適の「国故の整理」の提唱に対しても積極的に呼応する。胡適の「白話詩人王梵志」(第6巻第156期、1927・12)、「『孔雀東南飛』的年代」(第6巻第149期、1927・10)等の文章や「介紹幾部新出的史学書〔新出版史学書数種の紹介〕」(第4巻第91期、92期、1926・9)<sup>42</sup>を掲載して、陳垣の『二十史朔閏表』<sup>43</sup>や顧頡剛の『古史辨』〔第一冊〕、陳衡哲の『西洋史』〔下冊〕を推薦する。このほか、顧頡剛の『孟姜女故事之歴史的系統』(第3巻第75期 - 77期、1926・5)<sup>44</sup>、馮友蘭の『岐路灯』序(第6巻第135期、1927・7)、蘇雪林的『楚辞九歌』与中国古代河神祭典的關係(第8巻第204期 - 208期、1928・11 - 12)<sup>45</sup>、沈怡の「小説家与治河 兩部論及治河問題の小説、『鏡花縁』与『老残遊記』」(第4巻第93期、1926・9)はいずれも読む価値のある学術的文章である。



1926年1月



1927年1月

『現代評論』の文章の中で、もっとも毀譽褒貶のかまびすしく、議論紛々としたのは、陳西滢の閑話である。閑話は女師大紛争の中で楊蔭榆(校長)、章士釗(教育總長)に加勢して学生運動を中傷し、魯迅の手厳しい攻撃を受けた。しかし「五・三〇」惨案では現実を正視し、民族の尊嚴を擁護する。文芸短評のいくつかは、該博な学識と開明的な姿勢を表す。例えば「民衆的戲劇」(第1巻第2期、1924・12、劇評欄に掲載)等の文章は、春柳社や歐陽予倩、洪深の演劇改革運動を肯定する。「新文学運動以来的十部著作(上、下)」<sup>46</sup>は、大きな影響を持つ著作十一部を推薦する。そこには、呉稚暉の「一個新信仰の宇宙觀及人生觀」<sup>47</sup>、『胡適文存』、顧頡剛の『古史辯』、そして郁達夫の『沈淪』、魯迅の『呐喊』、郭沫若の『女神』、徐志摩の『志摩的詩』、丁西林的『一只馬蜂(一匹のスズメバチ)』<sup>48</sup>、楊振声の長篇小説『玉君』、謝冰心の小説集『超人』、黄白薇の詩劇『琳麗』<sup>49</sup>が含まれる。ここには、当代の人が当代の作品を選択する場合の避けがたい制約が見られる。しかし大体において妥当で見識がある。

陳西滢の縁故によって、当時燕京大学学生であった凌叔華が文学界に入る。凌叔華は気品のある透徹した心理描写によって、「酒後」(第1巻第5期、1925・1)、「綉枕」(第1巻第15期、1925・3)、「花之寺」(第2巻第48期、1925・11)、「綺霞」(女性主人公の名前) (第6巻第138期、139期、1927・7、8)等の小説を書く。1927年凌叔華は陳西滢と日本へハネムーン旅行をした後、「登富士山」(第8巻第193期、194期、1928・8)等の遊記を書き、澄んだ深みのある文章によって京派創作の先駆けとなった。

『現代評論』は文芸の原稿を採用するとき、名家と新人をともに重視するようにした。すでに文壇に名を馳せる作家は前半二巻で優勢を占める。そこには、郁達夫の小説「十一月初三日」(第1巻第1期 - 4期、1924・12 - 1925・1)、俞平伯の散文「西湖の六月十八夜」(第1巻第24期、1925・5)、聞一多の詩歌「洗衣曲」(第2巻第31期、1925・7)と「愛国的心」(同前)、「聞一多先生の書卓」(第2巻第41期、1925・9)、徐志摩の詩歌「翡冷翠(フィレンツェ)的一夜」(第3巻第56期、1926・1)と散文「斐倫翠(フィレンツェ)山居閑話」(第2巻第30期、1925・7)<sup>50</sup>、そして丁西林的一幕劇「酒後」(第1巻第13期、1925・3)、「『压迫』」(第1周年紀念増刊、1926・1)、「瞎了一隻眼! [目が一つ見えなくなった]」(第2周年紀念増刊、1927・1)が発表された。陳西滢訳のAndoré Maurois〔アンドレ・モーロワ、1885 - 1967〕の小説「少年歌徳之創造〔青年ゲーテの創造〕」(第5巻第108期 - 111期、

**中國銀行廣告**

總行設於上海英租界一十九路七十六號電話二二五五  
分行設於天津北京漢口廣州香港上海南京蘇州無錫常州南通揚州蕪湖漢口重慶成都西安長沙青島濟南煙台汕頭香港廣州

總行設於上海英租界一十九路七十六號電話二二五五  
分行設於天津北京漢口廣州香港上海南京蘇州無錫常州南通揚州蕪湖漢口重慶成都西安長沙青島濟南煙台汕頭香港廣州

總行設於上海英租界一十九路七十六號電話二二五五  
分行設於天津北京漢口廣州香港上海南京蘇州無錫常州南通揚州蕪湖漢口重慶成都西安長沙青島濟南煙台汕頭香港廣州

總行設於上海英租界一十九路七十六號電話二二五五  
分行設於天津北京漢口廣州香港上海南京蘇州無錫常州南通揚州蕪湖漢口重慶成都西安長沙青島濟南煙台汕頭香港廣州

第6巻第133期(1927年6月)の広告

1927・1、第5巻114期 - 119期、1927・2 - 3)<sup>51</sup>とメーリケの小説「神話裏的王子〔神話の中の王子〕」(第7巻第165期 - 167期、1928・2)も、ここに掲載される。

第二巻末から第三巻(1925・12)以降においては、極めて勤勉に投稿する小説家三人、王向辰(老向、1901 - 1958)、沈從文、胡也頻が現れる。王向辰の小説には、「繡花絹〔花の刺繍のハンカチ〕」(第2巻第50期、1925・11)、「棚匠〔小屋がけ職人〕」(第3巻第64期、1926・2)、「柳家墳の楊樹」(第5巻第112期、1927・1)<sup>52</sup>、「瞎林之死〔盲の林の死〕」(第5巻第120期、1927・3)等と、日本の狂言に似せた戯曲「渭水河濱〔渭水のほとり〕」(第7巻第161期、1928・1)がある。この題目から、王向辰が「あたかも魂まで黄土の泥に包まれたかのような」郷土作家であると感じられる。沈從文は『現代評論』の発行担当員を勤め、書簡体小説「在別一個国度裏〔別の国の中で〕」(第3巻第72期 - 75期、1926・4 - 5)を発表する。山賊の首領に迫られ強いて娶られた商人の娘が、自分の体験の中からこの山賊が愛憎をわきまえ、酸いも甘いもかみ分けた立派な男であり、聞き伝えるような恐ろしい形相の、人を殺して瞬きもせぬ悪魔とは違うことを、述べる。沈從文はまた「為琳」の筆名で「山鬼」(第6巻第136期、137期、1927・7)を書き、「懋琳」の筆名で『現代評論』ただ一つの長編小説「旧夢」(断続的に28期にわたって連載、1928・2 - 9)<sup>53</sup>を書く。これらの作品はなお未成熟ではあるけれども、『現代評論』は成熟のための契機を沈從文に与えた。沈從文は当時親友の胡也頻を『現代評論』に紹介し、胡也頻は「聖徒」(第5巻第122期、1927・4)、「往何処去〔どこへ行くのか〕」(第7巻第178期 - 180期、1928・5)等小説13篇と詩、散文、戯曲を発表した。

## 訳注

- \* 1: 底本は『二十世紀中国文学図誌』上下冊(楊義、張中良、中井政喜共著、台北業強出版社、1995・1)である。また、前書の増訂版『中国新文学図誌』上下冊(北京人民文学出版社、1996・8, 1997・12, 同第3次印刷)も参照する。なお翻訳文の中で、〔 〕は訳者の補足を示す。
- \* 2: 『南社叢刻』第二集は、『南社叢刻』第1冊(江蘇廣陵古籍刻印社影印、1996・4、全8冊)に所収。
- \* 3: 『柳亜子選集』上冊(人民出版社、1989・1)
- \* 4: 原文は、「願無尽廬詩話」であるが、『南社叢刻』第一集(『南社叢刻』第1冊、江蘇廣陵古籍刻印社影印、前掲)によれば、「願無尽齋詩話」である。いま『南社叢刻』第一集に従う。
- \* 5: 「次野鶴韻二首」(「未濟廬詩集」、『南社叢刻』第一集、『南社叢刻』第1冊 江蘇廣陵古籍刻印社影印、前掲 所収)によれば、「物到無機亦解鳴、水流激石証生平、天人魔物科難別、化湿卵胎数不清、国土莊嚴忘我相、電空簸蕩發雷声、一毛一孔一世界、何地能容厭世人。」とある。大意は次のようである。「物は無機質になっても解け音を出す、それは水流が石にぶつかって自らの平生を証するようなものだ。天使悪魔は科学上の区別を立てるの

が難しく、物の変化、水蒸気や、卵と胎は数え切れない。こうした国土の姿は莊嚴であつて自分の姿を忘れさせる、例えば稲妻のきらめく空が揺れ動いて雷鳴を発するのを見よ。一筋の毛一つの穴一つの世界、何処に厭世の人を容れる余地があるか。」

- \* 6: 『南社叢刻』第三集(『南社叢刻』第1冊、江蘇廣陵古籍刻印社影印、前掲)、『馬君武集』(莫世祥編、華中師範大学出版社、1991・10)によれば、1910年の作である。この句の大意は次のとおりである。「古い錦から新しい模様に変えるべきであつて、今の精神を古い鑄型に依存させない。」
- \* 7: 原文は、「能合欧亚文学之魂于一炉而共治者」であるが、『中国近代文学發展史』第3巻(郭延礼、山東教育出版社、1993・4)第34章第3節「馬君武的詩歌」に、「所以柳亜子称誉他的詩『能合欧亚文学之魂于一炉而共治者』」という指摘がある。いま『中国近代文学發展史』に従う。また褒めた人が柳亜子であることが分かる。出典未詳。
- \* 8: 「自序」(1913・5、『馬君武詩稿』、上海文明書局、1914・6、底本は、『馬君武集』、莫世祥編、前掲)に、「惟十年以前、君武于鼓吹新思潮、標榜愛国主義、固有微力焉」とある。
- \* 9: 原文は、「然所謂復古」であるが、『南社叢刻』第一集(『南社叢刻』第1冊、江蘇廣陵古籍刻印社影印、前掲)によれば、「然所謂復古者」である。いま『南社叢刻』第一集に従う。
- \* 10: 原文は、「亦不為復古、謂之真能復古可也」であるが、『南社叢刻』第一集(『南社叢刻』第1冊、前掲)によれば、「亦不為背古、謂之真能復古可也」である。いま『南社叢刻』第一集に従う。
- \* 11: 原文は、「巢南独尊唐風、与余相合、写示一章、即用留別」であるが、『磨劍室詩詞集』上(上海人民出版社、1985・1)によれば、「巢南独尊唐風与余相合、写示一章即用留別」である。いま『磨劍室詩詞集』に従う。なおこの題は、次のように続く。「並申止酒之勤、時余亦将帰梨里矣、二十用韻」
- \* 12: 原文は、「百年詩站為誰開」であるが、『磨劍室詩詞集』(前掲)によれば、「百年壇站為誰開」である。いま『磨劍室詩詞集』に従う。
- \* 13: 大意は次のようである。「いつの間にか急ぎ足の半月が昌亭にさしかけてきた。私はあなたと詩派を批評して、一代の模範とするものがすでに無いことを嘆く。百年会盟する場所は誰によって開かれるだろうか。流行して脇道へ流れて、始めて蘇軾、黄庭堅の欠陥が分かる。大雅という点からは陳子龍と夏完淳を推さなければならない。今別れにあたってお大事にと言う以外言葉もない。料理を食べる前にまず杯を干そう。」
- \* 14: 『中国近代文学史』(任訪秋等編、河南大学出版社、1988・11)に、「有人称贊亜子、『悲歌慷慨気吞虹、君是当年陸放翁』都是指他南社時期的創作。」(第3章第2節)とある。
- \* 15: 大意は次のとおりである。「私の孤独な憤りは地の裂けるのも防ごう。忍んで酔眼を開くと、たくさんの屍どもが目にはいる。新の国を称えたものには揚雄の頌がある。勸進の表は阮籍の手になった。しかしどうして沐猴(猿)が皇帝になることができようか。果たして腐鼠が時に乗じようとしているのだ。夜になって秦を滅ぼす夢を見、北伐の声の中で將兵に誓いを立てた。」
- \* 16: 「南社社友姓氏録」(柳亜子、『南社紀略』柳無忌編、上海人民出版社、1983・4 所収)によれば、「蔡寅、字清任、号治民、江蘇吳江人。已故。」とある。また『南社紀略』(柳亜子、前掲)によれば、「曾任滬軍都督府軍法司司長、江蘇司法籌備処処長、江蘇省長、国民政府司法部參事、浙高等法院温州分院院長。」とある。

- \* 17: 「南社社友姓氏録」(前掲)によれば、「姚光、字鳳石、号石子、江蘇金山人。」とある。
- \* 18: 「南社社友姓氏録」(前掲)によれば、「馮平、字心侠、号復蘇、別号壯公、江蘇太倉人。」
- \* 19: 原文は「稼軒、白石諸先輩遠甚也」であるが、『南社叢刻』第二十一集(『南社叢刻』第8冊、江蘇廣陵古籍刻印社影印、前掲)によれば、「稼軒、白石諸先哲遠甚也」である。いま『南社叢刻』第二十一集に従う。
- \* 20: 同治・光緒以後の詩人で、盛唐のみを尊崇するのではない流派、宋詩派の文学主張を受け継いだ(『中国近代文学辞典』、河南教育出版社、1993・8)。
- \* 21: 『南社紀略』(柳亜子、前掲)による。
- \* 22: 「南社社友姓氏録」(前掲)によれば、「原名熊湘、字文渠、一字鈍根、亦作屯根、号君剣、別号鈍安、湖南醴陵人。」
- \* 23: 中国の旧劇(京劇等の伝統的演劇)に相對するものとして、中国の新劇(原文、「話劇」。「話劇」の内容は近代的演劇を指すもの、日本の新劇にあたる。ゆえに新劇と訳すことにする)を考える。新劇を歴史的に見れば、その前史としての初期新劇(原文、「文明戲」や「新劇」)がある。歐陽予倩によれば、春柳劇場の初期新劇はその内容から言うと、次のようであった。「春柳の演劇は直接的に日本の新派劇を模倣したものであった。陸鏡若が帰国して、新派から坪内博士の行う文芸協会の姿勢へと傾いた。しかし新劇同志会が上海、湖南で演じた演劇は、十分の九がやはり新派の形であった。新派が採ったのはウェル・メイド・プレイ(Well made play)の方法で、近代劇の方法ではなかった。だから春柳の演劇は比較的整った melodrama ではあるが、私たちが現在演ずる近代劇ではない、と言うのである。」(「自我演戲以来」、『戲劇』第1巻第2期 - 6期、第2巻1期 - 4期、上海神州国光社、1929・7 - 1931・2) 新劇(「話劇」)がイブセン等の近代劇を指すものとするれば、その前史をなすものが初期新劇であったと思われる。歐陽予倩は、「当時陸鏡若は『ノラ』や『野鴨』を上演したいと強く思っていた。私は『復活』や『サロメ』を演じたいと強く思った。」(「自我演戲以来」、前掲)と言い、その後の部分で、こうした近代劇の上演が実現できなかったいくつかの理由を挙げている。
- \* 24: 「自我演戲以来」は、『戲劇』(第1巻第2期 - 6期、第2巻1期 - 4期、上海神州国光社、1929・7 - 1931・2)に連載される。  
原文は、「字也写得很好」、「……他往往在畫里找材料、很注重動作的姿勢」、「自己当模特兒供自己研究、得了結果、就根据這個結果、」であるが、『戲劇』第1巻第2期の「自我演戲以来」によれば、「字也写得好」、「……他往往在畫里找材料、很注重動作的姿式」、「自己当模特兒供自己的研究、得了結果、就根据着這結果、」である。いま『戲劇』に従う。
- \* 25: 「回憶春柳」(歐陽予倩、『中国話劇運動五十年史料輯』第1輯 中国戲劇出版社、1958 所収、底本は、『歐陽予倩全集』第6巻、上海文芸出版社、1990・9)では、「日本には老劇作家松居松翁がいて、李息霜の演技について極めて稱賛した。松居松翁はこの俳優を見て、フランスのモンマルトル小劇場の女優トフェリエの演じた椿姫を思い出した、と言う。」と紹介する。
- \* 26: 「回憶春柳」(歐陽予倩、前掲)に見える。
- \* 27: 「回憶春柳」(歐陽予倩、前掲)によれば、日本の新派劇作家佐藤紅緑の「潮」を中国語脚本に訳したものが、「猛回頭」であると言う。
- \* 28: 「回憶春柳」(歐陽予倩、前掲)によれば、日本の新派劇作家佐藤紅緑の「雲之響」を中国

語脚本に訳したものが、「社会鐘」と言う。

- \* 29: 「回憶春柳」(欧陽予倩、前掲)によれば、謀得利劇場は謀得利唱片公司〔レコード会社〕の倉庫の階上にあつたと言う。
- \* 30: 整った脚本がなく、劇のあら筋、幕数、配役を書いた大綱に沿って、俳優がその場で自由に脚色する演劇形式。
- \* 31: 「鴛鴦劍」は、「自我演戯以来」(欧陽予倩、前掲)「回憶春柳」(欧陽予倩、『欧陽予倩全集』第6巻 前掲 所収)によれば、尤三姐を扱ったもの、と言う。また、「自我演戯以来」(欧陽予倩、前掲)に「夏金桂」の作品名が見える。原文は、「夏金桂自焚記」とするが、いま「自我演戯以来」に従う。また原文は「王熙鳳大鬧寧国府」「晴雯」であるが、「自我演戯以来」(欧陽予倩、前掲)によれば、「大鬧寧国府〔大げさに寧国府を鬧がすこと〕」「晴雯補裘〔晴雯裘を補うこと〕」である。いま「自我演戯以来」に従う。
- \* 32: 秋瑾、徐錫麟はともに清末の革命烈士である。また清末に、もと捻軍の頭目張汶祥が両江総督馬新貽を刺殺する事件が起きた。
- \* 33: 原文は、「任天化」であるが、「自我演戯以来」(欧陽予倩、前掲)「談文明戯」(欧陽予倩、『中国話劇運動五十年史料輯』第1輯 前掲 所収、底本は、『欧陽予倩全集』第6巻、前掲)によれば、「任天知」である。いま「自我演戯以来」、「談文明戯」に従う。
- \* 34: 「談文明戯」(欧陽予倩、前掲)に見える。
- \* 35: 有正書局、原作はMRS. THOMAS HARDYの“THE MOTHER'S HEART”、日本の黒岩涙香訳からの重訳。『新編清末民初小説目録』(樽本照雄編、1997・10)による。
- \* 36: 有正書局、1910年出版、日本小説の翻訳。『新編清末民初小説目録』(樽本照雄編、前掲)による。
- \* 37: 『現代評論』の底本は、『現代評論』(岳麓書社、1999・11、中国近代期刊影印叢刊之四、全8冊)を使用した。また、『現代評論 総目 附 人名索引』(沢井律之、中島利郎編、啗唾之会、1984・4)『中国現代文学期刊目録匯編』上下冊(韓之友等編、天津人民出版社、1988・9)を参照した。
- \* 38: 増刊の内容は、『現代評論』(岳麓書社、前掲、全8冊)によれば、その表紙或いは題目はそれぞれ、『特別増刊第1号 関税会議特別増刊』(1925・10)、『現代評論増刊』(第一年週年紀念増刊、1926・1)、『現代評論二周年増刊』(1927・1)、『現代評論第三週年紀念増刊』(1928・6)である。
- \* 39: 原文は、「本刊内容、包函關於政治、經濟、法律、文芸、哲学、教育、科学各種文字。」であるが、『現代評論』(第1巻1期、前掲)によれば、「本刊内容、包函關於政治、經濟、法律、文芸、科学各種文字。」である。いま、『現代評論』に従う。
- \* 40: 党治問題について、時事短評 欄ではないが、「党治与用人」(錢端升、『現代評論』第6巻第146期、1927・9)「党治的鉄律」(山木、『現代評論』第6巻第148期、1927・10)「党治与法治」(彭学沛、『現代評論』第8巻第206,7,8期合併、1928・12)等の論文が掲載されている。
- \* 41: 原文では、「有人非但反对強權」、「有人本著科学的精神」であるが、『現代評論』(第3巻53期、前掲)によれば、「有人非但反抗強權」、「有人本科学的精神」である。いま、『現代評論』に従う。
- \* 42: 原文は「介紹幾種新出版的史学書」であるが、『現代評論』(第4巻第91期、92期、前掲)によれば「介紹幾部新出的史学書」である。いま『現代評論』に従う。

- \* 43 : 原文によれば『二十四史朔閏表』であるが、『現代評論』(第4巻第91期、92期、前掲)によれば「二十史朔閏表」である。いま、『現代評論』に従う。
- \* 44 : 原文によれば「孟姜女故事之歴史系統」であるが、『現代評論』(第3巻第75期 - 77期、前掲)によれば「孟姜女故事之歴史的系統」である。いま、『現代評論』に従う。
- \* 45 : 原文は「『楚辞・九歌』与古代河神祭典」とする。『現代評論』(第8巻204期、前掲)の表題は「『楚辞九歌』与中国古代河神祭典の關係」である。また『現代評論』(第8巻第205期 - 208期、前掲)は「楚辞九歌与古代河神祭典」とする。いま、『現代評論』(第8巻第204期、前掲)に従う。
- \* 46 : 『現代評論』(第3巻第71期、72期、1926・4)所収。ただ、『現代評論』の「閑話」欄には、本来それぞれの文章の表題はない。原文の表題「新文学運動以来の十部著作(上、下)」は、『西滄閑話』(新月社、1928・6初版、1931・2三版、上海書店影印、1982・2)によるものと思われる。
- \* 47 : 原文は「一個新信仰の人生觀及宇宙觀」であり、『現代評論』(第3巻71期、前掲)は「一個新信仰的宇宙觀与人生觀」であるが、原載の『太平洋』第4巻第1号(1923・8)の表題によれば「一個新信仰の宇宙觀及人生觀」である。いま、『太平洋』に従う。
- \* 48 : 『現代評論』(第3巻第66期、1926・3)の広告欄によると、「現代社文芸叢書」として、「第一種『玉君』 每本実価五角」「第二種『志摩的詩』 每本実価一元」、「第三種『一隻螞蜂及其他独幕劇』 每本実価三角」等が掲載されている。
- \* 49 : 陳源の「閑話」(『現代評論』第3巻第72期、1926・4)は、「麗琳」とする。しかし『中国現代文学総書目』(賈植芳等編、福建教育出版社、1993・12)によれば、「琳麗 白微著。上海商務印書館1925年初版。目次：琳麗(三幕詩劇)\付記(作者)」とする。いま『現代文学総書目』に従う。
- \* 50 : 原文は「翡冷翠山居閑話」であるが、『現代評論』第2巻第30期によれば「斐倫翠山居閑話」である。いま『現代評論』に従う。
- \* 51 : 第5巻第108期から第109期まで、「少年哥德之煩惱」と題されている。第5巻第110期から「少年歌德之創造」と変更される。この本は、名古屋大学国際言語文化研究科田所光男先生(フランス文学)のご教示によれば、『Les souffrances du jeune Werther』(Paris: J. Schiffrin, 1926. 『The National Union Catalog Pre-1956 Imprints』 volume 370に依る)のことである。ここに記して、田所光男先生のご教示に感謝申し上げます。
- \* 52 : 原文は「柳家墳的楊柳」であるが、『現代評論』第5巻第112期によれば「柳家墳的楊樹」である。いま『現代評論』に従う。
- \* 53 : 第7巻第168期 - 183期(1928・2 - 1928・6) 第8巻第187期 - 194期(1928・7 - 8) 第8巻第196期 - 199期(1928・9)